

スポーツには、言葉、性別、人種、障がいなどの壁はありません。そして健康や生きがいづくり、地域や経済の活性化、国際交流などに密接に関わり、人と人、企業と企業、北海道・札幌のモノ・コトをつなぐ大切な役割を担っています。このようなスポーツによるまちづくりについて、デフバスケットボール日本代表の手塚清貴選手にお話を伺いました。

東京2025デフリンピックが届けた熱
挑戦の背中へ、さらにその先へ



デフバスケットボール日本代表
北海道札幌聾学校 教員
手塚 清貴 さん

1987年生まれ、長野県出身。社会人クラブで経験を積み、2004年にデフバスケットボール日本代表入り。デフリンピックに4大会連続で出場し、初の国内開催となった2025年大会にも参加。現在は北海道札幌聾学校に勤務し、競技と教育の両面から子どもたちと向き合っている。

言葉を超えて伝わる熱量

デフリンピックが灯した希望

2025年11月、聴覚障害者の国際スポーツ大会「デフリンピック」が日本で初めて開催されました。地元で迎えた晴れ舞台には、満員の客席やハンドサインでの応援など一体感あふれる光景が広がっていました。笛の代わりに振られる旗や光の合図に呼应し、スピーディーに攻守が入れ替わる。その迫力は、初めて観戦した多くの人を驚かせたはず。手話や視線、わずかな振動を頼りにゴールを目指す私たちの熱量が、言葉を超えて確かに伝わっていました。今大会はデフスポーツの認知を広げただけでなく、子どもたちが自分の可能性に胸を膨らませる、大きなきっかけにもなったのではないのでしょうか。

楽しさの先に夢がある

挑戦し続ける姿で未来を照らす

現在、私は北海道札幌聾学校に勤務する傍ら、社会人クラブチーム「江別ワイルドボアーズ」に所属し、全国大会での勝利を目標に日々鍛錬を重ねています。健常者とも競い合うこの環境で自分を磨くことが、再び世界の舞台に立つための土台になると考えています。目標は2029年「デフリンピックギリシャ大会」。もう一度、あのコートに立つために挑戦を続けたい。

デフアスリート、そして教育者として子どもたちに伝えたいのは、「聞こえる・聞こえないに関わらず、誰もがスポーツを楽しむ」ということ。まずは純粋に楽しむ、その先に夢や挑戦が生まれます。自分自身が挑戦し続ける姿で、それを示していきたいと思っています。

